実践論文

道徳科の「内容項目」理解についての一考察

―教職科目「道徳教育の理論と実践」の担当を踏まえて―

和　田　充　弘
（びわこ学院大学教育福祉学部 准教授）

A Study on Understanding "Content Items" in the Subject of Morality: Based on the Charge of the Teaching Profession Subject "Theory and Practice of Moral Education"

Mitsuhiro Wada

Understanding the moral value of students as they develop into reading comprehension of the curriculum guidelines, interpretation of reading materials, and mock lessons in the lectures on moral teaching methods in the university's teaching course, gradually improved the accuracy. Initially, it remained a plain favor for interpersonal morals, such as kindness, compassion, friendship, and trust, but it turned into a more complex and structural understanding. Students' interests also extended to understanding more fundamental things such as normative awareness and the preciousness of life. Moreover, one of the triggers for such conversion was the focus on negative factors such as death and weakness. Backed by synergies between training in the teaching profession and much of the text-interpreting abilities cultivated in the humanities or social sciences, students transcend their personal views on morality and improve their inner qualities.

Keywords: Moral education, Moral value, Learning guidance plan

はじめに

近年新設された小中学校の道徳科（特別の教科　道徳）では、学校での教育活動全体で行う道徳教育の要として、道徳的諸価値の理解を通じた道徳性（道徳的心情、判断力、実践意欲と態度）の育成を目標としている。そして道徳的諸価値に関しては道徳科の内容（内容項目）として具体的に明示されており、A 主として自分自身に関すること、B 主として人との関わりに関すること、C主として集団や社会との関わりに関すること、D 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること、という４つの区分のもとに、中学校の場合、端的な熟語の表現と組み合わせて、合計22項目の短い文章が並べられている(1)。学習指導要領の解説ではこうした内容項目について、一方的な教え込みや知的な理解だけではなく、「教師と生徒が人間としてのよりよい生き方を求め、共に考え、共に語り合い、その実行に努めるための共通の課題」「生徒自らが調和的な道徳性を養うためのもの」であることが強調されている(2)。さらに同書では道徳的価値の理解について、その意義と大切さの理解であることに加え、自己理解、他者理解、人間理解、自然理解と関連づけ、考え議論する授業の根幹をなすものとして重視している(3)。

大学の教職科目（道徳科の指導法）でこうした諸点を丁寧に取り扱うべきことは言うまでもないが、特に大切なのは教員や学生も内容項目を理解する主要な担い手であり、同時にみずからの理解を検証し続けることが、教員養成の観点からも軽視することはできないということではないだろうか。本稿では過去６年にわたり提出された学習指導案を主な手がかりとして(4)、履修学生における道徳科の内容項目理解および教材理解の特徴を明らかにし、模擬授業におけるこれら２点の深化をみてゆくことにより、教職課程担当教員の立場から、道徳教育の現行制度についての課題と可能性を述べることにしたい(5)。

１　実践重視型講義への転換

当該講義では従来、道徳教育の現行制度の説明と、担当者の専門性を生かした思想・歴史の講義とを並列させていた。たとえば2014年度の春秋学期で

は、初回のオリエンテーションと最終回の授業内評価の間に、学習指導要領の精読（３、以下とも回数）、教材研究（１）、授業方法の研究（１）、道徳教育の思想（３）、欧米の道徳教育理論（２）、道徳教育の近現代史（３）の順で講義を行った。また以上と並行して、個人での学習指導案の作成から班単位による模擬授業の実施へと進めることもした。

しかし現在では文部科学省「道徳教育アーカイブ」の主なコンテンツを活用しながら、実践を重視した講義への転換を試みている[(6)]。たとえば2020年度の秋学期では、初回に学習指導案の作成と模擬授業の実施への日程を示したうえで、各回とも、①『中学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編』の順序を追った説明（第１章　総説から第５章　道徳科の評価まで）、②上記から第３章　道徳科の内容を独立させての全内容項目の説明、③文部科学省『小学校・中学校道徳　読み物資料集』掲載全作品の検討、④日本における道徳教育の思想と歴史（道徳の字義・語義、宗教・法律と道徳、朱熹「白鹿洞書院掲示」、笹山梅庵「寺子制誨之式目」、教育勅語、汐見や寿子さんの戦争体験、「新日本建設ノ教育方針」、修身の授業停止から道徳の時間特設まで）を並行させ、模擬授業が近づくに従い各回とも後半をグループワークに充てた。①②③はいずれも教育実践のトレーニングに直接結びつくだけではなく、学習指導要領の本文、解説文、読み物資料のそれぞれについて正しく鋭くテキストを解釈できることが、将来の良質な授業につながるであろうと考えた。④については、相対的なものの見方を伴いながら道徳教育を広く深く考えさせるための具体的な教養の一環として組み入れた。

また学習指導案については、Ａ４サイズで２枚を基本とし、資料は原則、文科省の読み物資料から、それ以外の場合は現物のコピーを添付するよう指示した。記載すべき項目としては①表題（「小（中）学校第〇学年　道徳科学習指導案」）、②主題名（授業のタイトル）、③内容項目（複数の項目を選択することや、文科省作成の読み物資料集から選択する場合、そこに記載の対応表と異なることも認めた）、④ねらい（③に掲げた内容項目と道徳性の各内訳とで構成）、⑤ねらいの設定理由（道徳的価値とできれば子どもの実態について、授業者の言葉で自身の考え・思いをまとめさせた）、⑥資料名と出典（読み物以外の選択も認めた）、⑦資料の特質（要約と活かし方）、⑧学習指導過程（展開では中心発問を明示）、⑨留意点及び工夫、を掲げた。

さらに模擬授業の実施に向けて、班のメンバーで採用すべき学習指導案を決めさせ、授業者、配布物の作成者、板書の計画・実施者などの役割分担をさせた。そして多くがワークシートを準備・配布する形で、また教室に備え付けたAV機器（パワーポイントと資料の掲示）と板書を有効に活用する形で、模擬授業が行われた。

2　学生による「内容項目」理解の特徴

以下、2015年度春学期から2020年度秋学期にかけて提出された、計９学期分の学習指導案にもとづき考察を進めることにする[7]。まず学生達はどの内容項目を選択しているのか。これについては③内容項目の記載をもとに[8]、〈別表１〉にまとめておいた。見出しの熟語に即して選択数をみてゆくと[9]、上位の５項目では多い順に、第１位、思いやり、感謝、第２位、自主、自律、自由と責任、第３位、友情、信頼、第４位、相互理解、寛容、第５位、遵法精神、公徳心、が挙げられる。また下位の５項目では、第１位、自然愛護、第２位、感動、畏敬の念、第３位、真理の探究、創造、第４位、公正、公平、社会正義、第５位、よりよい学校生活、集団生活の充実、が挙げられる。さらに内容項目全体の４区分に従うと、Ａ 主として自分自身に関することが計97点、Ｂ 主として人との関わりに関することが計165点、Ｃ 主として集団や社会との関わりに関することが計72点、Ｄ 主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関することが計27点となる。このように区分Ｂのうち礼儀を除く３点、それに区分Ａと区分Ｃのそれぞれ冒頭に掲げられている１点ずつで上位５点が占められている。下位のものでは区分Ａから１点、区分Ｃ、区分Ｄからそれぞれ２点が含まれている。

以上からはまず、区分Ｂの対人関係一般への関心の高さが読み取れる。区分Ａの自分自身に関することでは、自主、自律、自由と責任が重視されている一方で、個人の能力や資質を推し進めてゆこうとする傾向が若干弱い。区分Ｃの集団・社会との関わりでは、遵法精神、公徳心を例外として、項目数の多さの割に大半において数値が伸びていない。区分Ｄの生命、自然、崇高なものとの関わりでは、生命の尊さを除きいずれも低調である。道徳をどう捉えるか、道徳として何を重視すべきかという場合、学生達の関心からすれ

ば、対人関係のあり方が念頭に置かれ、自分自身に関することがこれに続き、集団・社会、自然環境、生活の現実を支えるより根底的なことがら（感動、畏敬の念や、よりよく生きる喜び）については、道徳としてはやや軽視されているということができるだろう。

では上位５点について、学習指導案の記載項目のうち⑤ねらいの設定理由において、選択した内容項目をどのように理解しているのか、学生達の記述を順にまとめてゆきたい。

第１位の思いやり、感謝については、中学校（以下とも）学習指導要領の本文に「思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること」とあり、解説文では思いやりを他者への能動的な接し方とし、その受け手からの対応を感謝とし、いずれも人間愛の精神の具現化であると捉えている[10]。これに対し学生達の記述では、積極的な自立への関与、コミュニケーションや行動の力といった積極性や実行力に関する表現が見られるものの、より多いのは支え合い、助け合い、よりどころ、親切、温かさ、柔和さ、希薄化への問題視といった、温厚な相互依存の関係を、思いやりと感謝のうちに見いだそうとするものである。

第２位の自主、自立、自由と責任については、指導要領の本文に「自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと」とあり、解説文では自己規律と自己決定、明るい心・真心をこめた具体的行為、良心的で忠実な義務の履行、付和雷同や責任転嫁の無い規範意識の向上が説かれている[11]。対する学生の記述にも自信、自己肯定といったより積極的な表現、本文や解説文にもある結果責任、良心が登場する。しかし量的にも目立つのは他人、他者、周囲、相手、クラスの雰囲気、信頼関係、思いやり、温かい心であり、自分自身の基本的なあり方は対人関係の問題へと、置き換えられている。学習指導要領が示す自主、自律、自由と責任の解釈がそのまま捉えられているとは言いがたい。

第３位の友情、信頼は学習指導要領の本文に「友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと」とあり、解説文では相互の信頼、敬愛、対等な関係で励まし、高め、協力し

合うことが説かれている[12]。対する学生達の記述では切磋琢磨、励まし高め合うこと、ぶつかった上での敬愛と信頼、よりよい関係への強化といったものが見られる反面、ここでも支え合い、助け合い、共感、悩みの共有といった温厚な相互依存の関係へと理解が傾いている。

第４位の相互理解、寛容は学習指導要領の本文に「自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていくこと」とあり、解説文では個性と独自性の尊重、他者のよい面の積極的な容認、それら謙虚さによる最終的な自己の向上が説かれている[13]。一方、学生の記述では多様性や独自性の尊重、謙虚さ、よりそい、協調、良好な関係、円滑なコミュニケーション、集団の和、共感的思考といった言葉が並ぶ。ここでも温厚な相互依存に相通じる関係が確認できるが、それを強固に展開させる側面が乏しい。

第５位の遵法精神、公徳心では、学習指導要領の本文に「法やきまりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、自他の権利を大切にし、義務を果たして、規律ある安定した社会の実現に努めること」とあり、解説文では摩擦の軽減、秩序と規律を守ることが個人の自由を保障すること、遵法精神の支えとしての公徳心、当事者として関心を持つべきことが説かれている[14]。これに対する学生の記述では共存、他者からの信頼、他人・相手の気持、思いやり、協調性、周りへの迷惑が挙げられるのとは別に、公共の場での、あるいは良心にもとづく権利・義務、万人の自由権、善悪の基準づくり、他者と自分を守るもの、協力的な生活といった表現も確認できる。遵法精神、公徳心は学生の関心が高い対人関係のあり方と重なり合いながらも、公共性への関心を視野に収めたものとなっている。ただし規範意識の問題をじっくり見据えたものは乏しい。

３　学生による教材理解の特徴

次に、当該の学生達が学習指導案を作成するにあたり、『小学校・中学校道徳読み物資料集』からどの作品が選ばれたのか。各項目のうち⑥資料名と出典の記載をもとに、その選択数の上位と下位をまとめた（〈別表２〉を参照、

文部科学省が対応させている内容項目を併記する)[15]。これをみると、おおむね学生達が多く選択した内容項目に対応しているものが上位に連なる。そのうち「言葉の向こうに」「ネット将棋」「知らない間の出来事」は情報モラルを取り扱ったものでもある。下位のものについては、４区分中のＣ 主として集団や社会との関わりに関すること、に関するものが多くを占めている。「絶やしてはならない」（緒方洪庵）「鳩が飛び立つ日」（石井筆子）「真の国際人」（嘉納治五郎）「妙見山の誓い」（岩崎弥太郎）「小川笙船」（赤ひげのモデル）「立志の人」（山川健次郎）と、偉人伝は総じて低調である[16]。

さらに上位の以下計６点について、文部科学省の組み合わせとは異なる内容項目の選択や、項目⑦資料の特質（要約と活かし方）の記述について検討を加えてみた。

インターネット書き込みの過熱を取り扱った「言葉の向こうに」では、相互理解、寛容のほかに、自主・自律、自由と責任、思いやり、感謝、礼儀が選ばれた。匿名の危険や顔が見えない他者への尊重に加え、想像力、気づき、自主的な考えの発信、誤解と衝突を超えた人間愛の大切さについての記述が見られた。より強固な思考と行動の必要性へと学生達の関心は展開していた。

チームメートと関わる主将の心の成長を取り上げた「背番号10」では、思いやり、感謝のほかに、向上心、個性の伸長、希望と勇気、克己と強い意志、友情、信頼、相互理解、寛容、集団生活の充実が選ばれた。人気の高い作品は複数の道徳的価値を含むのであろう。対人関係の道徳を支えるものとして、自分自身に関する道徳にあらためて焦点が当てられたのかもしれない。気づきをもたらす言葉や行動の働きかけの大切さを説く記述、挫折や報われない努力にも意味があるのだといった記述が見られた。

「ネット将棋」では、自主・自律、自由と責任のほかに、向上心、個性の伸長、思いやり、感謝、礼儀、相互理解、寛容が選ばれ、作品としての含蓄の深さを見せた。相手を尊敬し、勝負に向き合い、負けを認める誠実さ、人生は勝ち負けでは無い、自分の弱さに気づき自身を客観視することの大切さ、負けることへの抵抗感の克服がすなわち寛容である、対局者同士が真心で接することの自主性・自立性といった記述が見られた。学生達はこのテキストを通して厳しい勝負の世界を直視し、そこから積極的な徳の在りようを自在に描き出そうとしていたと考えられる。

「違うんだよ、健司」では文部科学省のねらいと一致し、うわべでは無い真の友情の大切さに触れる記述が数多く見られた。

美術部の女子生徒が剽窃まがいの絵画の出品について悩み、思いとどまった「闇の中の炎」では、遵法精神、公徳心のほかに、自主・自律、自由と責任、向上心、個性の伸長、よりよく生きる喜びが挙げられた。（善くない）真似と（評価できる）参考という内容項目を創作した学生もいた。自分らしさを大切にして自分に嘘をつかない正直さ、罪悪感や違和感がすなわち根底的な規範意識である、心の曇りや迷いを拭い去った誠実で納得できる行動の大切さ、葛藤を経た適切な選択こそが良心や正直にほかならない、言い訳を並べ立てるうしろめたさが実は規範意識とイコールである、著作権問題のデリケートさが学べるなど、学生の記述はユニークであった。作品の主人公を追体験することによって、規範意識の本質に迫ることができたのでは無いだろうか。

小学校版で最も多く取り上げられた「卓球は四人まで」では、友情、信頼のほかに、思いやりが内容項目から選ばれた。仲間集団にとどまらない友人関係への展開を説く作品だが、学生達の記述に従えば、そうした展開を可能にするのが、言葉かけなどの実践に徹するという、一言の重みをわきまえるという、思いやりであった。

内容項目の選択では幾分平板に見える学生達の理解であったが、読み物資料の読解へと進んだ段階でそれは主体性を帯びて多様化し、道徳的価値に確かさや深さが加えられた。

4　模擬授業における理解の深化

学生達による内容項目への理解は、模擬授業の段階へと進み、発問やワークシートの作成など学習指導過程の工夫を加えた、テキストのより構造的な解釈を行うことにより、さらに深化してゆく。ここに直近の2020年度秋学期の事例から３点紹介しておく。

第１点目として、「言葉の向こうに」を読み物資料から選び、相互理解、寛容の理解を目指した授業では、ワークシートを用いて、①自身がサッカーのＡ選手のファンだったとすれば、反論、無視、注意、その他の行動のうち、

いずれを選択するか、その理由は何か、②彼のファンである主人公の加奈子の行動に対し、肯定派、否定派双方の立場から、それぞれどう思うか、③ネットと普段の対面での対話とでは、何が違うか、④文中にある加奈子が発見した「すごいこと」とは何か、という問いが立てられた。本作品とそのねらいは自明の事柄に属する。しかしこうした問いを積み重ねることにより、わかりきったように思えたものごとが、実は複数の論点を含んでいることが明らかになってくる。道徳科のテキストについては、後からさまざまなすぐれた理解を引き出すことのできる意味の深さを備えながらも、それを可能とするためには、あえて特異さや技巧を加えない、わかりやすいストーリーと文章表現を先立てることが望ましいのではないか。人形遣いが息を吹き込む前の文楽人形のごとく「童顔で無表情」であることが求められるのではないか。

第２点目として、主人公の少年が祖父の死を経験する「その思いを受け継いで」を読み物資料から選び、生命の尊さの理解を目指した模擬授業を取り上げる。この教材も感動的ではあるが内容自体は至ってわかりやすい。ここでも教材を真に生かしたのは順序を踏んで配置された発問であった。「お母さんからじいちゃんの余命を知らされた僕は、なにを思っただろう。」「毎日じいちゃんに会いに行った僕の気持ちは。」「じいちゃんが僕の手を握り返してくれた時、僕はどう感じただろう。じいちゃんはどんな気持ちだっただろう。」「（死後に枕の下から見つけられた、少年の誕生日を祝う）のし袋をみた僕の気持ちは。じいちゃんはなぜのし袋を用意していたのだろう。」と、発問が重ねられることにより生命の尊さはさらに真実味を増していった。学生達が中心発問に設定したのは上記のうち最後のものであったが、そののし袋に書かれていたのは「これからもずっと大ちゃんのことを見守っているよ」とある「ふるえて力のないじいちゃんの字」であり、文章の締めくくりは「じいちゃんの温かな、そして強い思いがぎゅっとぼくの胸一杯におし寄せた」であった[17]。「言葉の向こうに」が問題視するネットの書き込みとは対照的な、手書きの文字の重みも、弱々しい字体が実は残された人々を元気づけ続けることも、それを実感させるのがこうした発問の力であったと考えられよう。

第３点目として、童話の初代「アンパンマン」（やなせたかし『十二の真珠』所収[18]）を題材に正義についての理解を目指した、ユニークな模擬授業を紹介しておく。ここで授業者は、やなせの戦争体験を踏まえた真実の正義とは

敵を倒すことではなく、眼前で餓死に瀕している人にパンを与えることであり、アンパンマンが自分の顔をちぎって人に食べさせ、本人が傷つきながらそれによって他人を助けるという愛と献身の行為が、正義の実践にほかならないことを説いた。授業の最後に強調されたのは相手を大切に思う心、すなわち多くの学生が関心を示す思いやりであった。絵本のコピー、やなせの別の著作、主題歌、板書、ワークシートを駆使しながら自己犠牲という難しいテーマの核心に迫り、その道徳的な意義を探し当てようとする優れた授業であった。ここでも十分なテキスト理解と学習指導過程の工夫が、道徳的価値の主体的な理解へとつながった。

むすびにかえて

道徳科の指導法を扱う教職課程の講義において、実践的なトレーニングを課すことの意義は、近い将来教壇に立つ学生達に、授業に直接役立つ技術を習得させるだけにとどまらない。学習指導要領の本文と解説の読解、読み物資料集をはじめとする資料の選択とその精読、学習指導過程を吟味する段階でのより構造化したテキスト解釈へと順序をたどるに従い、道徳的諸価値（内容項目）についての理解はその精度を高めていった。これらは教員を志す学生達にふさわしい、内面形成の過程と捉えることも許されるだろう。受講生の多くは文系学部の３年次生以上であった。すでに所属する学部・学科、あるいはゼミで、それぞれの専門分野ごとに文献を読むことを鍛えられてきたのだろう。すでに形成されつつあるテキスト解釈の能力が、内容項目の理解をもたらしたのだろう。一般大学における教員養成のメリットがここに述べたような形で発揮されていると解することもできよう。

また学生達による内容項目の理解はおおむね、温厚な相互依存の人間関係についての支持に始まり、それを強化し、深化させるものであった。さらには規範意識や生命の尊さといったより根底的な事柄についての本格的な理解も加えられた。おそらくそれらは日常的な関心に発しながら、それを超越してゆく取り組みでもあったのだろう。そして最後にひとつ付け加えれば、内容項目の理解を深めて広げる契機として、敗北、弱さ、死、自己犠牲といった否定的とされる要素が重視されていたことが見逃せない[19]。現在、児童生徒

における自己肯定感の育成が教育上の大きな課題とされ、道徳教育もそうした流れの中にあるとみてよい。しかし真の解決を望むのであれば、自己否定やそれに類する諸価値についても慎重に導入してゆくべきではないだろうか。

〈別表１〉道徳科の内容項目からの選択数

A	主として自分自身に関すること	
	自主、自律、自由と責任	46
	節度、節制	11
	向上心、個性の伸長	17
	希望と勇気、克己と強い意志	21
	真理の探究、創造	2
	小計	97
B	主として人との関わりに関すること	
	思いやり、感謝	64
	礼儀	14
	友情、信頼	46
	相互理解、寛容	41
	小計	165
C	主として集団や社会との関わりに関すること	
	遵法精神、公徳心	36
	公正、公平、社会正義	2
	社会参画、公共の精神	4
	勤労	5
	家族愛、家族生活の充実	4
	よりよい学校生活、集団生活の充実	2
	郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度	5
	我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度	4
	国際理解、国際貢献	10
	小計	72
D	主として生命や自然、崇高なものとの関わりに関すること	
	生命の尊さ	22
	自然愛護	1
	感動、畏敬の念	1
	よりよく生きる喜び	3
	小計	27

〈別表２〉読み物資料集からの選択数

中学校上位			
1	言葉の向こうに	28	相互理解、寛容
2	背番号10	23	思いやり、感謝
3	ネット将棋	18	自主、自律、自由と責任
4	違うんだよ、健司	14	友情、信頼
5	闇の中の炎	13	遵法精神、公徳心
中学校下位			
1	仏の銀蔵	1	遵法精神、公徳心
1	ロックンローラー	1	郷土を愛する態度
2	スイッチ	2	自主・自律、自由と責任
2	絶やしてはならない	2	生命の尊さ
2	鳩が飛び立つ日	2	社会参画、公共の精神
2	真の国際人	2	国際理解、国際貢献
小学校上位			
1	卓球は四人まで	13	友情、信頼
2	知らない間の出来事	8	友情、信頼
3	きまりは何のために	7	遵法精神、公徳心
3	人を作る道	7	我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度
小学校下位			
1	妙見山の誓い	0	家族愛、家族生活の充実
1	みんな、待ってるよ	0	よりよい学校生活、集団生活の充実
1	幸せコアラ	0	友情、信頼
1	小川笹船	0	集団生活の充実
1	立志の人	0	郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度／我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度

※ただし文科省作成読み物資料集以外からの選択も認めている。

注

⑴　2015年の学習指導要領の一部改正を受け、各内容項目には新たな見出しの熟語がつき、４区分のうちCDの順序が入れ替わった。内容項目の全般については澤田浩一『道徳的諸価値の探究―「考え、議論する」道徳のために―』学事出版2020、が詳しい。

⑵　文部科学省『中学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編』2015　文部科学省HP道徳教育アーカイブ掲載19頁。これと関連して貝塚茂樹は「徳目」を「人間が長い歴史的な時間の中で醸成し、生の営みから導き出した明快で簡明な指針である」と規定する。同『道徳教育の教科書』学術出版会2009　19頁。

⑶　和田充弘「文部科学省作成道徳教材の登場と「教科化」の動向について―小学校版のテキストと学習指導要領を事例として―」『教育文化』28 2019、に詳しい。

⑷　同志社大学今出川校地において2015年春学期から2020年秋学期にかけて、2018年に小学校、2019年に中学校での、道徳科の授業開始を前後する時期にあたる。

⑸　現行制度への経緯とその特徴については、押谷由夫「「特別の教科　道徳」設立までの道のり」、貝塚茂樹「「特別の教科　道徳」の成立とその意義」日本道徳教育学会全集編集委員会編著『新道徳教育全集第１巻道徳教育の変遷・展開・展望』第７、８章　学文社2021、が新しい。

⑹　その根拠としては教科化の実施に加え、学内での統一シラバス作成など、複数の担当者間における積極的な調整と協力の蓄積が考えられる。

⑺　2017年度までは春・秋学期、2018年度からは秋学期を担当。学習指導案の提出数は2015年度春学期が28点、同秋学期が36点、2016年度春学期が61点、同秋学期が41点、2017年度春学期が39点、同秋学期が29点、2018年度秋学期が51点、2019年度秋学期が22点、2020年度秋学期が23点、総数は330点である。プリントアウトで提出された学習指導案についてはスキャナーで取り込み、PDFファイルとしてデータ保存し、また現物を保管している。

⑻　③内容項目に不備がある場合、④ねらいの記載中から採用した。

⑼　2015年度春・秋学期については改訂前の学習指導要領を使用させている

ため、今回筆者があらためて見出しの熟語に対応させた。

⑽ 『中学校学習指導要領解説　特別の教科　道徳編』35・36頁。

⑾ 同前25・26頁。

⑿ 同前39頁。

⒀ 同前41頁。

⒁ 同前43頁。

⒂ 文部科学省『小学校道徳読み物資料集』2011、同『中学校道徳読み物資料集』2012　道徳教育アーカイブ掲載、を参照。同書は目次に続けて内容項目の対応表を掲げ、第２章　読み物資料の活用例では各作品のねらい、資料の特質、展開例、指導上の留意点及び工夫を掲載している。その他文部科学省『私たちの道徳』2014からは「２通の手紙」「うばわれた自由」「よわむし太郎」（以上４点）、「同じ仲間だから」「ブラッドレーの請求書」（以上３点）、それ以外の資料では計28点が当該の学生達によって選択されている。

⒃ 複数の作品において人物の性格と指定された内容項目との間に食い違いがみられる。伝記資料の有益性は疑いないが、内容項目との接合に正確を期すだけでなく、内容項目にとらわれない含蓄もあわせてテキスト化することが面白いのではないだろうか。

⒄ 『小学校道徳読み物資料集』92・93頁。

⒅ 復刊ドットコム2012　62～67頁。

⒆ 竹内整一が「哀れ」「憐み」を「自他の無常性や有限性また偶然性といったものに対する深い思い」を前提に「そうしたものを介してはじめて自他が開かれ、呼応するというような結びつき」と捉えるのが示唆的である。同『「やさしさ」と日本人―日本精神史入門―』筑摩書房2016　221頁。

要約

大学の教職課程における道徳科の指導法の講義において、学習指導要領の読解、学習指導案の作成、読み物教材の解釈、模擬授業へと展開してゆくに従い、学生達の道徳的価値についての理解は徐々に精度を高めていった。当

初は、たとえば親切、思いやり、友情、信頼といった、対人関係の道徳への平明な好感にとどまっていたが、それはより複雑で構造的な理解へと転化していった。学生達の関心は、規範意識や生命の尊さといった、より根底的な事柄への理解にも及んでいった。そしてこのような転化のひとつの契機としては、死や弱さといった、否定的な要素への着眼が見られた。教職課程における実践的なトレーニングの多くは文系学部で培われたテキスト解釈の能力との相乗効果に支えられ、学生達は道徳についての個人的な見解を超越させ、内面的な資質を向上させることができたのではないか。

キーワード：道徳教育、道徳的価値、学習指導要領